

## 反みんな主義あぶれ者公民館願望

徳島大学 開放実践センター 助教 西村美東士

ぼくは公民館をあぶれ者が集まる場所にした。その一室はオープンスペースになっていて、毎晩、ショットバー、カラオケ、クラブ（以前のディスコの小型版）などが開かれていた。あぶれ者は、ほかの「みんな」にはないエネルギーを秘めている。

今はあぶれ者ではなく、地域の顔役のための公民館になってしまっている。顔役は地域活動で忙しいのに、仕方なしに公民館の事業にも動員されたり、仕切り役を任せられたりしている。これでは彼らだけがますます疲れてしまう。それより、顔役たちはむしろ奥の会議室あたりでゆったりと「仕掛け」をねるのがいい。地域のルーティンワークに追われる彼らも、この会議室では楽しいアイデアを出せるよう、カーペットやソファーはふかふか

のものにしたい。特別会議室だ。そこには顔役同士が肩書きを捨て、たがいにいるがままでいられる「支持的風土」がある。公民館で何かを仕掛けたいと思った人は、賛同するほかの仲間とともに、ほかの顔役から足を引っ張られることなく、かといって義務的に協力してくれる人はなく、会議室からオープンスペースへと出撃していく。

そして、うまく仕掛けたいとは、準備をしたり、表舞台に立つたりするのは、その気になったあぶれ者に任せたい。彼らが失敗しても、それは成功のもと。本人がそのプロセスを楽しんでくれればそれでよし。その人が失敗して悔しければ、今度は改善してやってみたくなるだろう。もし顔役に相談してくれば、彼の話をじっくりと親切に聞いてあげてはし

い。そのとき、あふれ者のほうが顔役として自分より一枚上手だった、などということもあるかもしれない。あふれ者公民館では、学ぶ人であるあふれ者が、世の中や人間の真実を顔役に教える人になりうる。

ばくは、集団が苦手な人でも公民館に入ってもらうために、これを提案しているのではない。その考えはもう古い。「集団が苦手」というのも個人の特性にすぎず、長所も短所もある。その人もそのまま公民館を楽しむ権利はあるし、その人なりに地域にかかわる可能性をもっている。

むしろばくは、今後の公民館を、無理にみんなに適應するところというより（もちろん自然になじんでくれる分には文句はないが）、へその曲げ方を覚えるところとして重視したい。社会の進歩にはへそ曲がりも必要だ。ただし、外界や自分が見えていないへその曲げ方は本人にとっては不幸、社会にとってはただの迷惑になる。そこで公民館ならではの「意味ある他者」との出会いに期待したい。公民館は住民同士の相互教育機関なのだから、へそ曲がりの人をここにこして見守ってくれるはずだ（これは現実ではなく、ばくの願望）。それによって、立派なへそ曲がりになれるし、他者や地域社会から承認されたりもする。そ

うはいっても、あふれ者やへそ曲がりには、「気持ちも行動もみんな一致して」などという心境には最後まで至らないだろう。しかし、むしろ、そのような「みんな主義」への異議申し立てこそ、あふれ者の存在価値といえる。

自治会や婦人会は「みんなで支える地域」のための「みんな主義」正統派といってもよいかもしれない。しかし、「みんな」ってなんだろう。「みんな」という実体はどこにあるのか。このように、公民館においては、「みんなの気持ちが一致して、みんなで行動をするなんてこと、ほんとうにあるの？」と問い続け、個人ごとの異なりを大切にする機関であってほしい。「みんな違って、みんないい」（童謡詩人金子みすゞ）という言葉こそ、生涯学習社会におけるこれからの教育機関のあり方だ。

今は逆に、教育の場でも、学習者の間でも、「みんなで」という言葉がますます横行しつつある。「私は聞いていない。許していない。だから認めない」という本音を隠したまま、「みんなで決めていない」ということを口実にして、あふれ者のアイデアを集団の力で圧殺してしまう。「みんなで」は文字どおりの「殺し文句」だ。その「みんな」を受け持つ一人ひとりに聞きたい。「みんなで」という言葉にい

つたいただけあなた自身の実感が伴っているのか。そんなリアリティのない言葉を唱え続けるより、へそ曲がりには「じゃあ、自分でやってみたら」といつてやるほうがよほど楽しい。へそ曲がりを手伝いたい人は手伝えばよいけれど、「みんなで」手伝う必要などはまったくない。あふれ者のほうも、実体のない「みんな」に対して御託を並べたり、「みんな」に何とかしてもらおうとしたりするよりは、自分の責任で思い切りやらせてもらえばよい。そうなったら、公民館はとても楽しいところになるだろう。

ばくは、公民館自体を地域のほかの「みんな」とは違うあふれ者の存在にしたい。そうすれば、公民館は、生涯学習時代の個性的な地域教育拠点としてもっと輝けると思う。

